

(別紙2)

審査の結果の要旨

氏名 若狭基道

本論文は、エチオピア南西部で話されるアフロ・アジア語族オモ語派のウォライタ語について、著者自ら現地調査で集めた膨大なデータに依りつつ、その全体像をできるかぎり詳細に描こうとしたものである。

序章で本論文の目的と意義を説明した後、第1章ではウォライタ語の名称、話者人口、系統関係、周囲の言語との関係など、その背景が従来の研究の間の相違を含めて紹介される。第2章ではウォライタ語の音韻体系について、分節音、トーン、音節構造などが順に説明される。ウォライタ語で書かれた文献はごく僅かで、定着した正書法もないが、エチオピア文字とラテン文字によって書かれた資料があり、近年では書き言葉の教育も始められている。第3章は、生まれて間もないウォライタ語書き言葉、特にラテン文字による表記の特徴を、音韻体系と対照しつつ紹介する。

第4章は、ウォライタ語の語の特徴を扱う、本論文でもっとも長い章である。伝統的な分類に従って、各語類に属する語の形態的特徴と用法が豊富な用例とともに述べられる。名詞類は形態的特徴により、普通名詞、地名名詞、人名名詞、数詞などに分類される一方で、形容詞と名詞は連続的であること、普通名詞の語形変化は、具体形（個別の対象を指示する場合）と非具体形（属性や総称的な指示の場合）の2つのパラダイムに分かれ、数の区別（単数・複数）は具体形にしかないこと、地名名詞や人名名詞は非具体形のみを持つこと、従って、非具体形は **unmarked** な形式と考えられること、男性名詞に比べ女性名詞が少なく、しかもその多くは派生名詞であることなど、興味深い現象が紹介される。動詞についても、多くの活用形を検討した上で、未完了形が形態の点でも意味の点でも基本的な形式と考えられることを指摘し、さらに、名詞類と動詞のそれぞれについて、各語類を分析し、それらが形成された通時的プロセスを推定している。

第4章以降の章はいずれも短いですが、興味深い事実を含んでいる。第5章では語幹がどのように派生されるかが個々の派生接辞を列挙しつつ説明され、第6章では語順を中心に統語論が扱われる。また、第7章では敬語や周囲の言語との接触が紹介される。全体として、本論文で著者の目ざした、詳細で網羅的な記述は十分に達成されていると判断できる。

本論文の課題としては、説明にやや冗長な部分があること、第4章が4分の3を占め構成のバランスが悪いこと、データの一部として用いたウォライタ語聖書の文献学的位置づけが不十分であること、「疑問格」 **interrogative case** や「数え上げ格」 **counting case** のような格を設定することの説明がやや足りないことなどがあげられる。しかし、長期間にわたる現地調査により先行研究の記述を文字通りひとつひとつ確認し、さらに多くの新たな知見をもたらした点は、これらの欠点を補って余りあるものであり、間違いなくオモ語派の諸言語の研究を大きく進めるものである。以上の理由により、本審査委員会は、本論文を博士（文学）の学位を授与するに値するものとの結論に達した。